

自然教室チーム

早春のお楽しみ自然観察会・レポ

富江 文雄

令和3年度の最後となる自然観察会を3月7日(月)に実施した。オミクロン株によるコロナ感染症の猛威がなかなか収まらないが、ほとんどの会員が3回目のワクチン接種を終えて、まだまだ寒い早春の大淵池公園に集った。今回も講師に田代貢先生をお迎えし、最終的には18人の会員が参加、まだ冬芽がほとんどではあったが、植物を中心に観察した。大淵池は水を抜いていたのでカモ等の水鳥が見られず鳥の観察はできなかった。



まずは公園の駐車場にある植栽でシラカシとアラカシの相異をいま一度確認し、近隣の庭にある大王松の3枚葉に注目、三枚を集めると円形になるのを見て、松の葉は2葉でも5葉でも集めると円形になるとの説明を受けた。公園に入り、道の両側にある植物を順番に観察していった。マンリョウの葉の縁にはバクテリアを包むところがあり、共生する事で窒素の固定を図っている。

アオキの冬芽に着目、葉が中にある花を取り囲んで守っているのを実際に切り取って詳しく観察、カクレミノは異形葉で新しく出てきた葉と成長した葉では形状が違うのを確認した。

もうすぐ開花するコブシの花芽に注目、芽の



元に線が入っているのをルーペで調べた。この様に次々に内容を変えて植物の特性を学んだ。

例えば、一般的に樹木の幹は光合成しないと思われているが、必ずしもそうではない。幹が緑のクスノキがあり、これは幼木であるが明らかに光合成している。成長した幹は勿論光合成しない。葉をライターの火で炙ってみた。ソヨゴの葉はかなり大きな破裂音を出し、ウラジロガシでは油が染み出てくる。タラヨウでは死環と呼ばれる輪ができる。



その他、植物の実(果実や種)に関する説明も実際に解剖して確認することができた。面白いのは、クヌギの幹にクヌギカメムシが卵を産み付けており、それが白く連なっているのが見えた。樹木の看板の後ろにヤモリが越冬しているのが観察できた。このように、約3時間充実した観察会であった。

次回は4月4日(月)奈良公園で。